アナキズムの行方と自由

――一英国作家の軌跡を追って――

渡辺栄太郎

一

最近（一九八〇年十二月上旬現在）連日のように日本の新聞テレビにはポーランド自主労組による自由化要求の運動と、これを阻止しようとするソビエト政府の動静が報道され、米政府部内の見解としてここ数日中にもワルシャワ条約機構軍のポーランド軍事介入の可能性を伝えている。昨年十二月に起ったソ連のアフガニスタン武力侵攻は、満一年を経た今日、もはや抜きさしのならない深みの中に定着しようとし、一方、イランに於けるイスラム革命とイラン・イラク戦争、東南アジアのベトナム・カンボジア難民問題なども、一向に解決への糸口は見出されていない。

所で、このような国際的紛争対立は国家間の利害の衝突を軸に、民族、資源、宗教、イデオロギーの問題などが複雑に絡み合って生起するものには違いないが、その当該世界に生存する人間個人の幸福という観点から考えた場合には、その政治的自由と平等、社会体制と階級問題といった人間存在に係わる本質的要件に、どうしても無関心では居れなくなるであろう。言うまでもなく、人間が圧政から自分の幸福を守り、自由を獲得する闘争を続けてきたことは歴史によく示された通りである。中国にも古くから革命という言葉が存在したし、特に西洋近世に於ては、イギリスの清教徒革命、名誉革命、十九世紀の市民革命、それにフランス革命とアメリカの独立戦争、ひいてはロシアの共産主義革命など、平和的手段あるいは武力を通じて、民衆に

依る社会体制の変革が頻繁に繰り返されてきた。またこれと平行して、このような歴史的発展過程の中で、当該時代の欠陥を理論的に解明し、理想的な政治を実現する方法を究明した多くの思想家たちを輩出した。古く西欧ではアリストテレスやプラトン、近世に於けるホッブズ、ロック、ルソー、近代のベンサム、ミル、それにマルクスやレーニンなど、これらは政治思想史に画期的な業績を残した人物であった。二十世紀も最後の二十年を余すのみとなった現在、この混迷する国際化した世界の時代の中で、優れた政治家、学者思想家などがより良い政治の在り方を求めて、懸命に模索の努力を重ねていることであろう。

日本は一九四五年太平洋戦争に破れて民主主義を導入し、以後三十五年を経過して、それも漸く定着してきたかに見える。しかしこの民主主義がどの程度に作動し、生かされているかは見る人によってかなりの違いもあろう。ここ二十年来反動の歴史をたどって来たと言う人もあろうし、東南アジア諸国に比べて、最も進んだ国だと強調する人も居る。だが大切なことは、一人でも多くの国民が民主主義の価値を理解し、自分達の置かれている状況を正しく認識した上で、正確に意見を政治に反映させていくことである。だが現実には、多くの大衆が政治は難しくて判らないと考えていたり、無関心であったりする場合が決して少なくはない。そのために、出来得る限り、少しでも多くの努力が国民の政治的教養のために割かれれば良いのは言うまでもない。

しかしながら国民の一人ひとりが政治知識の専門家になることなどは、到底できる相談ではないであろう。そこで大衆的な、或いは市民的な政治の見方というものが、当然大きく比重を増してくるものと思われる。こういう訳で、ここに専門的でない一般市民的な見地から、日常生活に得られる情報に基いて、社会体制や階級問題、それに自由と平等の理念に関して抱いている原則的感懐を述べるのも、全く無意義なものではないと考える。特に筆者は英文学を専攻している関係から、イギリスの文学社会に現われた政治的現象としての問題の促え方を、させていただきたいと思う。

さて、近代欧米の作家や詩人の中で、政治に関心を持った人達は非常に多い。彼等は何らかの形で政治的意見を述べ、その市民的生活と政治が不可分であることを認識してきたのである。特にイギリスではマッシュー・アーノルドが十九世紀の後半、文学批評の領域に本格的な政治論説[1]を取り入れて以来、二十世紀に入ってバーナード・ショーやハックスレーが演劇や小説に社会政治問題を扱ってきたが、政治的意見を発表する一方で、自らも直接政治運動に参加した作家にハーバート・リード"Herbert Read"(1893—1968)が居た。リードは彼自身の第一次大戦参戦の経験から、また当時の美術運動の思想的根拠として、アナキズムに深く係ったことで知られている。そこで本論では彼がどのようにアナキズム運動に関係し、どんな意見を述べ、如何ような結果に落着いたかを、国際アナキズムの流れと絡んで跡づけ、この運動の本質が何であったかを簡潔に考えてみようと思う。

ハーバート・リードは一八九三年、ヨークシャーに農民の子として生れ、リーズ大学を学業半ばで大戦に従軍、その体験から詩集を出して、まず文学者としてのスタートを切った。戦後はヴィクトリア・アンド・アルバー博物館に勤務し、以後美術に深く関係するようになってイギリス文化協会や美術協会の役員になったり、遂には現代美術協会を設立して自ら会長になったりした。しかしリードにとって、第一次大戦の戦争体験はともかく重大であった。彼は、従来の伝統的形式や秩序を存在の不可欠な要素だとは認めているが、進歩し創造するためには破壊を必要とし、そのために詩人としての本質的なあり方として、アナキストに共鳴するものがあると考えたのである。そこで彼が明確にアナキズム運動に参画したのは、一九三八年に公表した"The Poetry and Anarchism"「詩とアナキズム」をもって始ったと言えるだろう。彼はこの後も引き続いて社会改造に対する熱情を持ち続け、"The Philosophy of Anarchism"(1940)「アナキズムの哲学」、"The Paradox of Anarchism"(1941)「アナキズムの逆説」、"The Politics of Unpolitical"(1943)「政治嫌いの政治論」、"Existentialism, Marxism and Anarchism"(1949)「実存主義・マ

ルクシズム・アナキズム」を、それに“Chains of Freedom”(1946—52)「自由の鎖」と次つぎに労作を発表した。その後「政治嫌いの政治論」を除いて、新たに“Revolution and Reason”(1953)「革命と理性」を加えて序論とし、他の作品を全部合わせて、“Anarchy and Order”「無秩序と秩序」という名で一冊にまとめられた。

所で、つぎにはこの「無秩序と秩序」を詳細に検討することは控えて、そこに語られている意見の幾つかを引き出し、彼のアナキズムに対する考えを簡単に概括してみることにしたい。

二

まず初めに「アナキズムの哲学」の冒頭にある一節を取り上げてみよう。

“Nobody seriously believes in the social philosophies of the immediate past. There are a few people, but a diminishing number, who still believe that Marxism, as an economic system, offers a coherent alternative to capitalism, and socialism has, indeed triumphed in one country. But it has not changed the servile nature of human bondage. Man is everywhere still in chains.”(2)

「如何なる人も、つい先の過去の社会哲学を真面目に信じてはいない。マルクシズムが経済体系として、資本主義に一貫して取って替わるものと未だ信じている人が僅かに居るが、その数も次第に減ってきた。そして事実、社会主義は一つの国で成功を収めたが、それは人間拘束の奴隷的情況を変えはしなかった。人間は今もなお、どこででも鎖に繋がれている。」

資本主義体制による矛盾を根底的に改革しようとした共産主義運動は、一八七一年のパリ・コンミューンを経て、一九一七年、ロシアに於て所謂十月革命に成功した。最初は、このロシアのコミュニズム体制が人間の社会的自由を保証し、階級的拘束をなくすよう期待された時期があった。しかし時がたち、二十年の歳月を経ても人間はその束縛から解放されないばかりか、リードにとって、むしろ自由は抑圧されてきたように見えたのである。即ち、彼はロシアに於ける共産主義革命の結果に失望してしまったのである。たまたまこの頃起ったのがスペインの内乱であった。

一九三六年、長い間弾圧されてきたアナキズム運動が、アナルコ・サンジカリズムという形をとって、一つの現実的勢力としてスペインに実現したものであった。当時ヒットラーやムッソリーニと手を組んだフランコと対抗し、やがてはこれらを退けて、アナキズムが人間の自由と尊厳を重んずる社会を建設し得ると信ずるようになったのである。

所で彼がアナキズムに強く関心を持った理由として、他に二つのことが挙げられている。一つはリードがヨークシャー育ちの農民の出身であり、農村的生活に対する郷愁と愛着が強かった。これがアナキズムの指導者だったバクーニンやクロポトキン、或いはトルストイが地主や農民だったことに親しみを感じたからとも言えるだろう。マルクシズムは産業労働者のための政治思想であるように思えたと彼は述懐している。他の一つは彼の詩人芸術家としての立場から来たものである。これは第一章で軽く触れたように、詩を含めて芸術の創造が本質的に既成の形式を破壊する所に生命があると考えていたことに一致する。

"To make life, to insure progress, to create interest and vividness, it is necessary to break form, to distort pattern, to change the nature of our civilization. In order to create it is necessary to destroy, and the agent of destruction in society is the poet. I believe that the poet is necessarily an anarchist, and——"(3)

「生活をなし、進歩を確実なものとし、興味と生気を創造するためには、形式を破り、型をひねり、我れわれの文明の性質を変えることが必要である。創造するためには破壊が必要であり、社会の中で破壊をなす行為者が詩人なのである。私は詩人は必然的にアナキストなのだと信ずる——」

第一次大戦に参加して、彼は人生に関して宿命論的な考えを持つようになった。闘争は万物の究極的状態であって、それに伴って続く流動や偶発が宇宙の進化を支配する原理であると悟った。そこで彼の宿命論は無為を意味するものでなく、人びとを行動に駆りたてるというものである。世界は人間解放の理想的社会に向って進んで行くが、果てしなくその道は遠い。しかし人間は一歩一歩それに向って進んで行かなければならないと考えたのである。

所で現実社会に於て、このような理想は資本主義、個人

の物質的利益を最優先する社会では正しく実現され得ず、先に見たようにロシアの共産社会でも自由は得られなかった。それで彼の目指すアナキズム共同社会の形式を、スペインの労働組合方式に求めた。これがアナルコ・サンジカリズムである。リードは民主主義を体現するアナキズムの条件として、次の三点を挙げた。

一、生産のすべてが直接に使用するために行なわれ、利潤追求のために利用されないこと。

二、各人はその能力に応じて他に与え、その必要に従って受け取るべき相互扶助の様式をとること。

三、各産業の労働者は当該産業を集団的に所有し、自主管理すべきこと。

彼は以上の三点の上に労働組合の団結とストライキ権を通じて、中央集権に依らない相互扶助の無政府社会を構想してみたのである。所でこのような労働組合をもとにして、国家としての機能的社会組織が出来るであろうか。例えば労働組合間の衝突はどう裁くのであるか。このような疑問に対しては、衝突の原因は労働組合の機能以外の所にあり、個人的な競り合いに基くものであって、考え方一つによって排除できると言っている。

"In general, trade unions can agree with one another well enough even in a capitalist society, in spite of all its incitement to rivalry and aggressiveness."(4)

「一般的に労働組合は資本主義社会に於てさえも、競争や攻撃のあらゆる刺激にも拘らず、お互い充分に合意することができる。」

でもこのように国家的経済機能がすべて可能だとしても、刑法の執行や諸外国との外交問題や教育にはどう対処すればよいか。この問いに対して、アナキストは次のように答えるという。このような非機能的活動の多くは非機能的国家にとって枝葉的でしかない。犯罪は主として個人財産制の反動であり、外交問題は主に経済にその源泉と動機を有する。この他に普通法、幼児教育、公衆道徳というような機能組織外の問題もあるが、これらは常識の範囲の中で、共同体に固有の善意にてらして解決されると主張する。そのためにこの共同体は、国家のような非人格的で仰

仰しいものになる必然は全くないと言う。

"In this sense anarchism implies a universal decentralization of authority, and a universal simplification of life.[5]"

「この意味でアナキズムは権威の普遍的分散と、生活の普遍的単純化を意味している。」

——のである。このようなことが現代文明社会の中で現実に可能かどうかは別として、アナキズムは集権的政府を廃し、最終的には国家体制を解消することを目的としている。この事についてリードは大よそ次のように語っている。マルクスもエンゲルスも実は国家の消滅を窮極目標にしていた。彼等の抱いていたのは、プロレタリアートによって国家権力を掌握し、生産手段を国有化して個人の利益に共することを防ぎ、これによって階級の消滅を図ることであった。こうすることによってやがては国家権力によって人間を支配する必要が薄らぎ、人間は事物の管理や生産過程の指導にたづさわればよく、民主化や自由化が進んで国家は消滅するという見通しであった。しかし国家の廃止を理念とする点は同じでも、共産主義とアナキズムは指導性に対する考え方に大きな開きがあるとリードは指摘し、前者が特定の指導者を要するのと対照に、アナキズムは相互扶助の原理に基くと主張する。

"I call it anarchism because that word emphasizes, as no other, the central doctrine——the abolition of the state and the creation of a cooperative commonwealth.[6]"

「私はそれをアナキズムと呼ぶ。その言葉は他に比類がない程に中心的な教義——国家の廃止と共同的共和社会の創造を強調しているからである。」

リードはこのアナキズム思想を述べるのに、プルードン以来の多くのアナキズム理論家が科学的見解を有していると考えていた。特にクロポトキンの言葉を多く引用し、この哲学がいかに科学的根拠に基くものであるかを示そうとしているかに見える。そしてそれらの思想家が彼らなりに人類の幸福の条件を求めて、必死の努力をしたことを評価したとも言える。彼は晩年の著作で、人間は自分たちを囲

む社会環境と調整がつかねば生きることが出来ず、終局的には人生一切のことが基本的人格の達成、修養に掛っていると語っている。しかしその前に、「真理の普遍性を承認し、我れわれの生活を理性の支配に委ねることが是非必要」[7]と認めている所は、十九世紀マッシュー・アーノルドの「教養と無秩序」"Culture and Anarchy"に説かれた国民の理性の涵養に依る社会の救済という思考と軌を一にするものがあると言えるであろう。そしてこのような発想は、基本的にいって、やはり文学者、芸術家らしい思考法として捉えることが出来ると思うのである。

三

この章ではまずアナキズムがいつ、如何にして起り、どのような経過を辿って来たか、その思想と歴史を簡単に振り返ってみようと思う。このアナキズムの全盛時代は一八八〇年から一九一四年頃までといえる。自動車、映画、飛行機が発明され、自転車、新聞が一般化してきた時代であった。市民生活に変革をもたらすと同時に、社会的にはヨーロッパ各国とも、組織化と中央集権化が進展した時代であった。アナキストたちはこの組織化され、特定の人間に権力が集中していくのに強く反抗し、十九世紀の抱えた数かずの禍い、不公平などのあらゆる悪が、国家という機構の中で、人間による人間の支配によってなされるものと考えたのである。それで、すべての権力を破壊し、人間が自分の能力に合わせて幸せに暮らせる自由で平等な社会を建設しようとした。だがどうしてその偉大な変革を達成するか、アナキズムは統一した理論を持っていなかった。アナキズムの初期の指導者はミカエル・バクーニン（一八一四―一八七六）であった。彼は農民、産業労働者、知識階級の失業者や学生など、すべての下層階級による急激な革命を主張していた。一方、彼の尊敬していた指導者にピエール・ヨセフ・プルードン（一八〇九―一八六五）が居た。その理想は中世のギルドのような各おの独立した経済体の中で、人は公平に仕事を分担し、野心なく幸福な人生を送れる社会を作りあげることであった。この二人がそれぞれ初期のアナキズムにバクーニン派とプルードン派を形成して

いたが、その後いろいろなアナキスト思想家が出現した。その中で最も優れた人物がピーター・クロポトキン（一八四二―一九二一）である。元来地理学者であった彼は、高度な文明は競争でなく協力に依って作られるものだと考え、自然科学のダーウィンの進化論と対立するような楽観的な原理を導入したのであった。

所で一九世紀のアナキスト達は、現実には社会変革の可能性を即時的で劇的な「暴力」という手段に求めていた。暗殺と爆弾がその手口だったのである。アナキストの無差別テロが個人の生命を脅かし、彼等の思想が既成の社会秩序と組織への挑戦であったために、一般市民からも強い反感を買った。一八九二年三月一一日と二七日の両日には、パリの中心地サンジェルマン通りとクリシー通りのビルに爆弾が投げ込まれた。犯人ラバコールは三日後逮捕されて死刑に処せられたが、犯罪歴のある男だったに拘らず、アナキストたちの間では彼を英雄視する風潮が強まった。そしてこれ以後しばらくの間、テロの最盛期を迎えることとなった。スペインのアンダルシア地方では、飢餓におびえた農民たちがアナキスト指導者のもとでヘレスの反乱（一八九二年）を引き起こし、ロシアの大学には度重なる皇帝による権力の迫害から、学生を中心にアナキスト集団が結成された。こうしてアナキズムはヨーロッパの各地で、社会的不公平に対する正当な反抗として、その素地を作ったのである。

一八八一年三月一日にロシア皇帝アレクサンドル二世が暗殺された。この犯人はロシアの革命家グループであったが、アナキストたちはこれに共鳴して行動を起こし、ロンドンでアナキスト大会（一八八一年七月一四日）を開いて、国際的なアナキスト組織の結成を決議した。実際には以後二度とこの団体の会議は開けなかったが、この一度の会議がヨーロッパ各地のアナキスト地下組織を活気づけ、その「行動による宣伝活動」という決議に従って暴力行為をエスカレートさせた。一八九三年以降の主なものを挙げると、九三年にバルセロナやパリで三回の爆弾事件、その中一回はベーランによるフランス下院でのもの、九四年に又パリでの事件、次いでリオでカルノ大統領の暗殺、九七年

スペイン首相カスティーロ狙撃、九八年ジュネーブでのオーストリア皇后暗殺、一九〇〇年イタリア、ウンベルト一世の暗殺――と暗い事件が続く。

これらの暴力事件が相次ぐ中で、アナキストの中には、果して理想社会の実現のために暴力が正しい手段なのかということに疑問を感じる者がいた。そしてこうした疑問の中から、極端な個人主義とサンジカリズム（革命的労働組合主義）の二つの流れが生れたのである。前者は社会変革を待たずに、一人ひとりの人間がアナキスト思想を生活行動の中に取り入れ、「自由」の名の下にフリーラヴ、社会法の無視、兵役の拒否を主張するものであった。これに対して後者は経済的問題を中心とし、労働組合を通じて社会の変革を目指したものである。つまり自分たちの根本にある相反する二つの原理、「自由」と「組織」を巧みに調和させ、アナキズム社会となって資本主義に代って登場して来るものと信じていた。これが後、アナルコ・サンジカリズムと呼ばれ、アナキスト変革運動の中で実質的成果を収める殆ど唯一のものとなったのである。

一八七一年のパリ・コンミューンは一時的にも労働者階級によって樹立された革命政権として名高いが、実質的にはこの中に多数のアナキストが参加していた。その後一九〇五年のロシア革命に比べて地味ではあったが、スペインのバルセロナに於て、一九〇七年七月マドリッドの中央政府に対して、アナキストを中心とする大衆による反乱が起った。この反乱でバルセロナ市は一時完全に人民のものとなったが、一週間ほどで鎮圧されることとなる。しかしこの後アナキスト労働組合が各地にいくつも現われ、一九一〇年には全国労働連合（ＣＮＴ）が結成されるに至った。これは各地方単位に組合を組織し、「自由」と「統制」という相異なるテーマを、柔らかい組織機構の中に妥協させていくものであった。これが後のスペイン内戦で、共和国側にあってファッシズムと勇敢に戦う指導的役割を果したものである。

しかし以後、一時イタリアでストライキを武器にアナキスト運動の機運が盛り上った外は、アナキストたちは各国の政府からだけでなく、社会主義政党からも敵視され、孤

立して行くこととなった。ロシアに於ては農民アナキストのマクノは、一九二〇年、ボルシェヴィキに依って壊滅的打撃を受けて一掃されてしまった。「組織、中央集権化、赤軍の三つ」[8]がロシアに共産革命を成功させた要因だと言ったビクトル・サージの指摘もあるが、結果的にみて、頑固で盲目的な目的のために、アナキズムは敗れ去ったのであった。

※　※　※

さてハーバート・リードのアナキズムへの参加は、一九三八年の「詩とアナキズム」で始っている。彼はこの後も次つぎにアナキズムに関する著書を出して文学を通じて参加しただけでなく、政治的にも実際に活動していた。一九四五年四月の「フリーダム・プレス」事件では、反戦と革命の件でフリーダム社の四人の編集者が逮捕されたとき、バートランド・ラッセルやラスキ、プリーストリなどと自由防衛委員会を結成し、みずから、委員長となって、三人の懲役の判決を受けたアナキストの擁護に奔走した。この時期に行った二つの演説は後に「自由は犯罪か」（一九四五）と題する小冊子にまとめられたが、そこには言論の自由を守る気迫と、獄中の同志への連帯感があふれていたという。この頃がリードのアナキズムに最も深く関わっていた時代であったと言える。

一九五三年、リードは英国美術界への多年の貢献が評価されてか、ナイトの爵位を授けられることになった。そこでアナキストである彼がこの叙勲を受けるべきかどうかに関し、「フリーダム」紙上で大部論議されて世間の注目を浴びたらしい。結局彼は爵位を受け、これ以後「フリーダム・プレス」とも他のアナキスト団体とも手を切ることとなってしまった。この五三年に書かれた「革命と理性」の註がきには、次のような文章がある。

"Many anarchists are unconscious authoritarians, because they cling illogically to the notion of uniformity (they may call it equality); not realizing that the human species, like any other species in nature, develops individual variations. Uniformity must be enforced, and can be enforced only by a centralized

power, i.e. by the State."(9)

「多くのアナキストたちは無意識の権力主義者だ。というのも彼らは均等性という概念に、むやみに執着するからである。（彼らはこれを平等というかもしれないが）、人間は自然界の他のどんな種とも同じように、個人的な変異というものを発展させることを感じとらない。均等性は強制されなければならず、集中された権力、即ち国家に依ってのみ強制され得るものである。」

ここには未だアナキズムに失望したとは言えなくても、少くともアナキストに対する批判を読み取ることが出来よう。だがそれと共に、アナキストが国家の集中権力を認めざるを得ないという自己矛盾に陥ったとも言えないであろうか。だがいずれにせよ、彼は受勲を機にアナキストではなくなったのである。その後は一九六八年に死去するまで、核保有反対闘争や百人委員会に参加して活躍していたが、それはアナキストの立場からは離れた平和主義者としてであった。いわば本質的に言って、リードは根っからのアナキストというのではなく、第一次大戦の体験を通して自由を重んずる平和主義に入った思想家であって、最後にはまたその本来の芸術的平和主義者の姿に立ち戻ったのだと言うことが出来るだろう。

四

さて二十世紀も八十年代に入った現在、近い将来にアナキズムが資本主義にとって代るものだと本気で考えている人は殆どいないであろう。文学者ハーバート・リードも、五十年代既にアナキズムとは決別して行った。しかし半世紀まえまでは、既成の社会秩序に反抗し、資本主義を滅ぼした後にアナキズム社会が誕生するものと信じて、多くの人びとが流血を繰り返してきた事実がある。人間は自分たちの幸福と自由を求めて、試行錯誤しながらも、莫大な犠牲を払ってきたとも言える。そこでアナキズムとは一体何だったのだろうか、何故実現に成功しなかったのか、そしていつの日かは成就し得るものであろうか。我れわれは当然、このような問題に突き当らざるを得なくなってくる。所でアナキズムというものは、その本質自体、みずからの自由を阻害する権力を、全く否定する所にその生命があっ

たと言えるであろう。皮肉な言い方をすれば、もしアナキストが自分達の課題を解決し、自由を手中に収めていたなら、アナキズムはその生きいきとした活力を失っていたのではなかろうか。問題は、組織または秩序というものは、少くとも何らかの形に於て、これを統括する部分、つまり集中的力、権限というものを前提として成立するものではないかという事である。我れわれの肉体の機能の中枢に頭脳があり、卑近な動物社会の集団の中にも、権能の原始的様式に相当するものが存在するのに気付かねばなるまい。人間とてその例外ではなく、個個別別に生存することは出来ない。社会があれば、必ずそれを統括調整する所がなければ、社会として機能して行かないであろう。つまり人間社会の体現としての国家に、何らかの権力が発生するのは不可避な自然現象であると考えざるを得ないのである。

所で国家存立の正当性を主張する理由に、市民の安全性や自由を保護するために必要という夜警国家論的な考え方もあるが、現実には過去、現在、未来を問わず、国家に関する多くの歴史上の実例に悪を見ない訳にはゆかない。実は十九世紀の中期から後期にかけての、第三章で触れた左翼急進主義の闘争の中で、マルクス主義とアナキズムは国家権力を本質的に悪とみる点では一致していたのであった。これをマルクスの考えに立ち戻っていえば、彼にも最高の人間的価値としての自由を肯定し、国家の存在は自由の実現と両立しないという考えはあったのである。彼はただ、プロレタリアの政治秩序が最上のものであるとしたのではなく、せいぜい人間がより高度の社会形態に進む途上の必要悪と考えたに留る。これに対してアナキスト達は、人類を国家なき未来へ導く革命の過程の中で労働者大衆の国家を創るよう提案したのと違って、国家体制そのものの解消を革命的な過程の一部とみなしたのだった。エンゲルスの手紙の中に、次のような一節がある。

「無政府主義者たちは、物事を逆立ちさせた。彼らは、プロレタリア革命は、国家という政治組織を打倒することに依って開始されねばならぬと宣言した。だが、そうした時に国家を破壊することは、勝利したプロレタリア階級が新たに獲得した権力を主張し、その

敵である資本家をおさえつけ、社会を経済的に革命する唯一つの機関を破壊することになるだろう。ところで、そうした機関がなくては、一切の勝利は新たな敗北と、パリ・コミューン直後のそれに類似した労働者の大量虐殺に終るに違いない。[10]」

つまる所、アナキズムとマルクス主義は、窮極的には国家を廃止するために、国家を必要とするか否かの問題について争ったということになる。またレーニンの語ったことに次のような言葉がある。

「我れわれは、終極目標としての国家廃止の問題については無政府主義者に不賛成ではない。われわれは、この目標を達成するために、しばらくの間は搾取者に反対して国家権力のもっている道具や資源や方法を利用せねばならない。[11]」

このように、これら二つの思想の間には、戦略的理論に著しい差異が横たわっていた。それでこの相違について、今更めて要約すれば、ほぼ次のようなことになるだろう。即ち、古典的なマルクス主義もアナキズムも窮極的には人間の自由を拘束する悪としての国家を廃した理想の社会を目指していたが、前者は先ず第一に資本主義という生産活動に於ける隷属関係を廃止しようとする。いわば「資本の専制」から、「労働者の経済的解放」を達成することを第一義とし、国家自体の存在をむしろ利用していくという戦略にある。これに対して、アナキズムは国家を社会に於ける悪の源泉とみなし、人間の自由を抑圧する決定的要因として、これを直接的に破壊してしまおうとする。この二つの潮流が、一八四〇年にマルクスがプルードンと決別し、やがてマルクスとロシアのアナキスト、バクーニンとの間、或いは両者の信奉者間の激烈な闘争として歴史上に現われたのだと言えるであろう。

所で本章の初めの方で述べたように、人間社会の中でも何らかの調整中枢は必要であり、そのために何らかの形の権力機関が不可避であるとすれば、人間社会の組織体としての国家を一ぺんに解消しようとすることは、如何にしても現実性がないと判断せざるを得まい。一九二〇年に於けるロシア・アナキストの敗北は、こうした基本的な理論の

面でも、マルクシズムに比して現実的合理性に欠ける所が多かったことには、疑う余地がないのではなかろうか。

※　※　※

次に第三章でサンジカリズムと共に取り上げたもう一つの流れである個人主義的アナキズムを中心に、アナキズムに関連する運動の種々相について、極く軽く言及しておきたいと思う。一口に個人的アナキズムと言っても、そういうまとまった運動があるわけではなく、これを教育、芸術、生活運動などの人間生活の色いろな面で、それぞれの立場から実践して行こうとするものであった。唯彼らにとって、個人の自由はやがて全体の自由につながると考える意味では、ストライキなどの大衆行動と同じ役割を果すものと言えるだろう。そして彼らに共通していえることは、伝統的な生活規範から離れ、既成の倫理観をかなぐり棄てて、各人が自由に行動できる社会を求めたことであった。それはやがて物質と性が自由になる、彼らの描く「夢の社会」を実現するための運動にまで広がって行く。

先ず教育界では、スペインで宗教性を排して理性教育を主張したフランシスコ・フェレルが有名である。次いでフランスのセバスチャン・フォールの「蜂の巣」学校、成人教育のフェルナンド・ペルーティエ、ドイツからイギリスに逃れて労働者の知的教育に貢献したルドルフ・ロッカーなどがよく知られている。このほか、各地のアナキストが主催する学校が、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてかなりの数に達していた。また「戦争と平和」の著者レオ・トルストイはクリスチャン・アナキストなどと言われ、生涯を反権力者として過しつつ、市民の農村生活に帰る運動に努力していた。

次に、芸術の世界でも、既成の価値観念を棄て、自分たちの作品を通じて社会の改革を求める風潮があった。まず印象派や後期印象派の画家たちが技術面で新しい分野を開拓し、シュール・レアリズムやダダイズムがブルジョア的偽善や既成観念を粉砕するということで、アナキズムに連携していったのである。ハーバート・リードが、芸術は破壊するものと規定したのは、この点を指して語ったものであった。また文学に於てはマラルメやドーデなどがアナキ

ズム的自由に関心を示していたし、オスカー・ワイルドが完全個人主義を主張していたことは良く知られていよう。またイブセンは「人民の敵」という劇の中で、新しい社会機構の誕生を予言したのであった。

これらの他に性の解放を予言したアナキストにエミール・アルマンが居り、産児制限運動のエマ・ゴールドマンやマーガレット・サンガーなどは、女性解放に功績を残した自由人として、この系列に入れて考えることも出来よう。

五

だがこれらのアナキスト運動は、各人がそれぞれの分野で抑圧からの自由を求め、それぞれに理想を探求してきたのであって、政治的圧力になるには余りに断片過ぎた。そしてアナキズム全体としては、クロポトキン以来ゴールドマンに至る人道的アナキストの活躍に拘らず、アナキズムの暴力的イメージを変えることは出来なかった。唯アナルコ・サンジカリズムだけが、二十世紀前半の労働史の中に重要な位置を占めたことが大きな足跡として残されるだろう。それともう一つ忘れられてならないことは、アナキズムが痛烈な社会批判をなして、実らずとも歴史の進歩に大きな役割を果したことである。しかし現代では、心理学が人間に闘争本能と合わせて安全を求める本能のあるのを解明し、社会学は人間が集団の中ですぐにリーダーを出す性質があるのを観察した。そして支配者のいない集団は、団結力の弱まることも研究された。アナキストは権力を認めないその本質ゆえに、失敗してきたのであり、またいつかは権力の支配のない自由な社会が訪れるという神話を信じて行動してきたのだった。イギリスの新進歴史学者、ローデリック・ケドワードの言葉を借りると、

「アナキストばかりでなく、ヨーロッパの歴史にはこのような未来にむけられた神話がいくつもあった。キリスト教も、マルクス主義も同様に、未来を啓示する神話によって導かれていった。キリスト教は神の国を現世にみることであり、マルクス主義は無階級社会であり、アナキズムの場合は、自由で平等な人間像である。」(12)

即ちアナキズムとは結局、自由という、永遠の彼方にある人間理想に対する信仰の一つの現世的様式であった、といえるであろう。

さて、アナキズムの現況について、「アナキズム運動は、もはや革命運動といえぬものに退化し、殆んど思想同好者の趣味の集まりと堕し、現実を離れた古典談義に終始」[13]するまでに力を失ったという表現がある。たしかに、アナキズム運動は社会の陰に埋没してしまって、今はその声も聞かれない。しかし現在、毎日のように新聞・テレビを賑わせているポーランドのワレサ議長をリーダーとする自主管理労組のソビエト国家主義に対する闘争一つを取ってみても、権力の抑圧に対する人間の自由の為の戦いは、事実として果てしなく続いているのが判る。また――

「二回の世界戦争をひきおこして、民衆におびただしい血と汗を強要しながら、いぜんとしてくずれ去らず、国家独占資本主義として立直り、権威的、官僚的国家資本主義と向い合って、人類全体を道連れにしようとする、資本主義の最終的な危機という現代の状況がある」[14]という記述もある。現代は米ソの対立を中心に、原水爆、生物兵器、宇宙科学的な開発を伴った人類破滅の危機に向って進んでいるとしか言いようがない。またこのまま放置すれば、何世紀か後に数百億にも達するはずの人口爆発をどうするか。人類が国家の枠をはずして、平和で、自由平等な社会を創設する為には、恐らく、人間性の改革の問題までが関わってくるのではないか。しかし人間性の変革は程遠い。アナキズムは権力に対する自由の戦いとして永遠に意義深いが、その前に現実に国家に所属して生活する我れわれの一人でも多くが、政治的自覚を高め、「国家悪の重要な一面、つまり、その国家に活力を賦与し、国家悪をおこなわしめてきた（日本）国民の責任分有、ひいては、国家悪をくりかえさない歯どめを作る」[15]覚悟が必要であろう。そして少しでもより適切に、現代の世界に山積した難問を解決するよう努力せねばなるまい。

また一方では、マルクス主義、ファッシズム、現代民主主義などと続く政治思想史の中で、アナキズムがその存在

を認知されているようには思えない。恐らく政治体系としてまとまり得るものとは看做されていないことに依るのであろう。確かに、国家社会に於ける権力の存在を認めた上で、如何に大衆によって権力をコントロールするかという問題の方が遙かに現実的であると言える。それで衝突する人間の自由を超越した理念としては、オックスフォードの哲学者トマス・ヒル・グリーン（一八三六―八二）の提唱した、健全な「人格の成長」[16]こそ、現実の人間が尊重すべき最高の価値理念として評価してよいのではなかろうか。これが保証される所では自由も正義も、平等も愛も、寛容の中に調整され得るからであり、またそれを可能にする環境の存在をも保証しているからである。

（注）

（1）「教養と無秩序」"Culture and Anarchy" マッシュー・アーノルド（Matthew Arnold (1822–1888) により、一八六九年出版になった作品。

（2）"The Philosophy of Anarchism", Anarchy and Order; Essays in Politics by Herbert Read. Faber & Faber Limited. 24 Russell Square, London. p.35, l.3.

（3）"Poetry and Anarchism", Anarchy and Order. p.58, l.19.

（4）"The Paradox of Anarchism", Ibid. p.133, l.22.

（5）"The Paradox of Anarchism", Ibid. p.134, l.18.

（6）"Poetry and Anarchism" Ibid. p.102, l.8.

（7）'But it is very necessary that we should once again admit the universalism of truth and submit our lives to the rule of reason.' "Poetry and Anarchism", Ibid. p.107, l.6.

（8）「アナキストたち（バクーニンからヒッピーまで）」"The Anarchists" ローデリック・ケドワード著、ロバート・アレキサンダー2世訳。鶴書房。八二ページ参照。

（9）"Revolution and Reason" Anarchy and Order, Introduction. p.24, l.36.

（10）一八八三年四月一八日のヴァン・パッテンへの手紙。「書簡選集」四一七ページ。

（11）「国家と革命」第I巻、レーニン「選集」第2巻一八一ページ。

（12）「アナキストたち（バクーニンからヒッピーまで）」一二〇ページ中段六行。

（13）「現代のアナキズム」ダニエル・ゲラン著、江口幹訳、三一書房。二三一ページ、一四行。

（14）「アナキズム思想史」大沢正道著、現代思潮社。二八一ページ、九行。

（15）「国家悪と『私』（アナキズムの蘇生をめぐって）」、菊

池昌典氏。昭和五一年五月三一日、朝日新聞夕刊。

(16) 「政治学への接近」、田中浩・安世舟著、学陽書房。五八ページ参照。